

試し読み版

飛龍公主

イトリアン



巨道空二

表紙イラスト：白之下あかめ

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『飛龍公主イーファン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



飛龍公主
イト
ファン

巨道空二

表紙／日之下あかめ

登場人物紹介

Characters

イーファン

古代中国に存在した騎馬民族の国リン、その国王の四女。男児のなかった国王により長男として育てられ、幼若の頃より多くの戦いに参加し功績を上げる。

フォンルン

イーファンの義兄。国務を牛耳る権力者。

ひょうほう

標苞

リンの敵国「成」の将軍。肥満体の醜悪な巨漢。

ばげん

馬弦

「成」国兵士。元は、周辺国から軽蔑されている異民族の出身。

土煙が渦巻いていた。平原を吹き渡る風が砂塵を巻き上げ中、悲鳴と怒号が流れていく。戦だった。騎兵と騎兵の激突は一方の壊滅に終わり、勝利した騎馬隊が歩兵を蹂躪する。騎馬民族の放つ矢が降り注ぐと歩兵たちからも悲鳴があがるのだ。

「逃げる、逃げるおおっ！ 將軍たちも逃げているぞーっ」

誰かが叫ぶと、辛うじて陣を支えていた兵士たちも戦意を失って崩れ始めた。なだれをうって潰走かいそうする軍隊はもはや機能せず、敵にえぐられ、削られていくばかりとなる。もはや一方的な戦いであり、遠目にも勝敗は明らかであった。

「敵軍は馬弦ばげんめの陣を除き総崩れとなりました」

「総大将の標苞ひょうぼうはどうしているか」

「すでに引いております」

「やはりな。つまりらぬ、あとは各隊に任せよ」

「はっ」

小高い丘の上から戦況を見渡していた人影が吐き捨てるように言う。敵将が部下を見捨てて真つ先に逃げ出したのが気に入らないのだ。これでは兵士たちは犬死にだ。

「敵将、標苞を追撃する。この人数でよい。ついてこいっ！」

軽やかな動作で馬に跨がる人物の鎧は美々しく飾られ、高貴な地位を示していた。武将……それも高位の將軍であろう。まだ若いながらも、部下の心服ぶりはかなりのものであ

り、将器を感じさせる。

白い布で口元を隠す人物は目元も涼やかに髪を後ろに馬の尾のごとくにまとめ、鮮やかな赤と白の髪飾りで飾っていた。まるで役者のごとき美しさである。だが、その美しさは危険な美しさだ。獐猛な狩猟獣のごとき精悍さであった。

「出撃っ！」

凜と通る号令とともに、騎馬隊が出発する。少数精鋭であることがひと目でわかる整然とした隊列が波のごとくに土煙を巻き上げ疾駆する。その旗には龍と雲が風になびきながら戦場を睥睨していた。飛龍。それがこの將軍の異名であった。

「国王陛下、ご出座」

先触れが国王の出座を告げると、ざわめきは急速に静まっていく。初老ながらも精悍な顔つきの王が玉座につくの、廷臣たちは平伏して待つ。その中に異彩を放つ集団があった。武装し、衣服すらも皆とは違う人々。軍人たちである。誇らしげな武官たちの功績が文官によって読み上げられる。

「第一の功、イーファン太子。敵陣を崩し、追い立てて功はなほだ大なり。第二の功、シユルハ將軍。敵側面を突いた功大なり。第三の功……」

さすが飛龍殿である、さすがは太子様といったざわめきの中、鐘が鳴らされてまた静か

になる。玉音が発せられるのだ。

「イーファンよ。此度の戦勝、まことに見事。褒美をとらすゆえ、近くよるがよい」
「はっ」

短く答えた將軍は唇に笑みを浮かべて玉座に歩み寄り、膝をつく。黒髪を束ねて後ろに流した姿は涼やかな目元もあつて玲瓏とし、実に美しい姿である。軍人としては華奢な姿だったが、姿勢や動作が美しいためにひ弱さはまったく感じられない。

「これらをとらせる。目録をここへ」

金子、玉石といった財物のあとに数え上げられたのは髪飾りと紗の反物であつた。目を見張るイーファンに、目を細めた国王は優しく語りかけた。

「將軍だ、太子だといつてもイーファンとて我が娘。身の飾りも必要であろう。新年の祝賀にはその紗で作らせた衣をまとうがよいぞ」

「陛下……」

思わず顔を上げたイーファンに微笑みかける国王の顔は、後継者たる第四王女へのねぎらいと愛情に満ちている。我知らず頬を染めて平伏する男装の麗人の表情は一瞬にして將軍から若い女性へと変わってしまった。いかに化粧をしてもごまかされぬ美貌が柔らかな娘のものに変わっているのを、廷臣たちは驚きと賛嘆の目で見るといった。

飛龍公主。姫君を表す公主と勇ましい飛龍とはそぐわないはずであつたが、それがリン

国第四王女イーファンの呼び名であった。男児のなかつた国王によつて男子として育てられた彼女は幼少より優れた素質を見せていた。

父王に従い幼いころから優れた戦績を残しており、後継者として立太子式を終えた後に女性であることが明らかにされた。国内には衝撃が走つたが、その資質とまだ若い父王の手前公式に異を唱えるものはいなかつた。

飛龍と呼ばれる女將軍。その弓から放たれる鏑矢は一際高くうなり、龍声と称されるほどに敵から恐れられているのだつた。

「甲冑に身を包んでいても、あの美形、お着替えになれば、さぞお美しいに違いない」
「いやいや、お母上もまた美形であつたぞ。装つたところを拝見したいものじゃ」

賛嘆の言葉の中、男装の麗人が元の席に戻る。甲冑は細身であり、よく見れば女性の柔らかな曲線を内包していることがわかる。白い肌と黒髪と、黒曜石のごとくきらめく瞳。ほつそりとした首筋の肌は滑らかで傷一つないだろうと思われた。

男性として見れば細身であつたが、女性であれば無理もない。鎧のデザインも女性のなやかな肢体を包み込む優美な曲線を描き、意外なほどに女性らしい美しいプロポーションの持ち主であることがうかがえた。

男装の王女將軍イーファン。その名は辺境の小国の王の娘のものでありながら、中原全域に響き渡つていた。若く美形の王女でありながら、勇猛さと指揮の鮮やかさを兼ね備え

る稀有な存在として、飛龍公主の呼び名はあまりに有名だったのだ。

ちっ。かすかに舌を鳴らす音。飛龍公主と呼ばれる次期国王イーファンであったが、その存在をこころよく思っていないものも少なくない。国王長女の婿フォンルンをはじめとする一族の男たちがそうだ。イーファンがいなければ次期国王の座が転がり込んでくるかもしれないからだ。

だが、勲功第一を誇る彼女に対し表立つて反対を述べることのできるものはいない。国王が第四王女に寄せる信頼と愛情は絶対であり、彼女に手を出すことは国王の激怒を買うこと必定だったからである。

数ヶ月後。飛龍公主は再び戦場にあつた。隣国『成』^{せい}との戦である。中原の大国である成に対してイーファンたちの国であるリンは小国であり、常に圧迫されていた。定着したとはいえ騎馬民族であるリンの軍力は精強ではあつたが、成の圧倒的な人口にものを云わせた物量作戦に押されているのだつた。

未明。草原はまだ暗かつた。風が草の葉を微かに揺らし、冷たい空気が戦場の興奮に火照る肌をくすぐつた。まだ炊事の火の煙の立たない自国。敵軍は安心しきつているようだ。「よいか、夜明けまでが勝負じゃ。我が騎馬隊で敵陣を混乱させたところに本隊が到着する。本隊到着後は敵の殲滅は本隊に任せ、我が隊は側面に回り退却する敵を撃つ。いつまでも

痛に身体が震えるだけで敏感な部分に強烈な刺激が走っていた。

「見る。どンドン濡れてくるではないか。この淫乱めがっ」

「うっ、うそだ……このような……」

それは繊細な女性器を守ろうとするだけの粘液の分泌であって、おそらくは彼女が感じているというようなものではなかっただろう。だが、女として生きてきた時間の短い彼女にとっては信じがたい悪夢そのものであって、その頑強な精神に一筋のヒビが入った瞬間だった。

「自分の淫乱さを思い知ったところで、コレをくれてやるぞっ」

イーファンの尻を打ち据えていた手が敵将の股間からそそり立つ肉塊に添えられた。赤黒い肉の槍はすでに臨戦態勢であって、哀れな女囚の最後の防御を突き破る準備はすでにできていた。

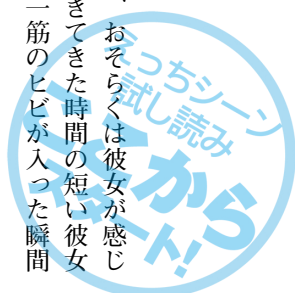
「汁気が足りないようじゃが、これを塗ればよいじゃろう」

「う、ううっ……」

怪しげな膏薬のようなものを逸物に塗りながら笑みを浮かべるのから、もはや怯えた表情で顔を背けることしかできない。屈辱と恐怖が心の中に広がっているのだった。

「成国將軍標苞、男女イーファン攻略一番乗りぞっ」

「ば、ばかなっ！ や、やめろっ、や、あっあうううっ——っ」



ズブズブズブウウウウウッ！

未だ開通したことのない玉門を一気に突き破る剛槍はヒクつく墜壁の抵抗に速度をゆるめるが、力任せにイーファンの内奥を打ち抜いていく。苦痛と処女地を蹂躪される衝撃に震える女体は太い杭を抱かされたままガクガクと震えていた。

拒否したくとも、女体の構造はひたすらに男根を締めつけ、心ならずも憎い敵を悦ばせてしまう。情けなさに唇を噛むと、乱れた黒髪が一筋頬にかかるのだった。

「ふはははははっ、いい締めつけじゃっ！ フォンルン殿、一番槍をお譲りいただいたこと、感謝いたしますぞっ！」

「いやいや、わしはこのような男女は好みではありませんでな。はっはっは」

男たちのいやらしい笑いの中で、貫かれている女はただ尻を揺らし、悶え、喘ぐしかない。兵士たちの欲望に血走った目で見られながらも、野卑な言葉で嘲笑されようとも、何一つできないのだ。

（この屈辱、必ず、必ず返すっ。なのに……これはっ……）

ヌチュツ、ジュプツ——。淫靡な水音がまじりつつあった。悲しいことに、それは彼女自身の神聖な部分、今まさに汚されてしまったその部分が発していた。ぬめりをおびた粘膜は徐々に男のモノになじみ、激しい締めつけの中にも奇妙な感覚を生じていた。

「ふふん。いよいよ感じてきたか？」

「そつ、そんなことあるわけないだろうつ。早くこれを抜けつ」

必死で強がるイーファンだったが、ズブズブと繰り返し貫かれると言葉が途切れてしまふ。今まで感じたことのない感覚が狭穴をくり広げられる苦痛の中にじわじわと広がっていく。それは男の腰が打ちつけられる衝撃とともに皮膚から、粘膜から身体の奥に染み込んでいくのだ。

「くっ……うっ、うあつ……ああつ……く、くやしいつ」

「はははははつ。悔しいだけか？ 気持ちいいのだろう、淫乱な蛇めが」

蛇は龍の眷属だという。だが、蛇は同時に淫乱の象徴としても認識されていた。淫らな生き物と決めつけられる屈辱に身体がこわばった。

「我が……淫乱などと……あるわけないでは……くふうつ」

背中にのしかかってくる男が、優美なラインを描く乳房を鷲掴みにしてきたのだ。なぜか身体はビクン、と大きく反応して恥ずかしい声が出てしまう。

（なっ、なんだ、この感覚……身体が……身体がおかしいつ）

「とろけてきているではないか。くくくつ……よいのだろう？」

トクン、トクン、トクン——。自分の鼓動とともに、乳首が微かにうずく。男にそのままれたちっぽけな突起がみるみるうちに固くなり、女の胸を切なく締めつけてくるのだ。それは、彼女が目を背けてきた肉の快楽に他ならなかった。

ズブツ、ズチュルツ、ヌチヌチュツ——。

「よい音が聞こえてくるではないか。よがり声も嘯み殺せるものではないぞ」

「ばかなっ……我は……あうっ……感じてなどっ……ふはあっ……」

ニタリと笑った敵将がうなじに息を吹きかけてくると全身に痺れが走った。それは恥辱の中にも奇妙な甘美さをともなっていて、追い詰められた女将を戸惑わせるのだった。

(こ……これが女の感覚だというのかっ……これが、これがあつ)

それは、イーファンが遠ざけてきた肉の喜び。戦場では男以上であろうとし、街にあつては暗殺者や人目を意識してきた彼女は性に関してはおあまりに未熟であつた。お付きの女官たちとの戯れで微かに快感を感じたとしても無視してきた彼女である。

「いくら口では否定しても、身体はほんに正直なものじゃ。可愛いものよ」

後ろから覆い被さる怨敵の手が半裸の肌をまさぐってくると、なぜか身体が揺れてしまう。屈辱のうちに声を嘯み殺しながらも、動揺は深く、深く浸透していくのだ。

「うあつ……ああつ……さわるなっ……そこに触るなあつ」

敵将の手が下腹部に回り込むとつなぎ止められた飛龍の身悶えが激しくなった。男のいやらしい指が目指すのは、秘処の上端に位置する最も敏感な部分。小さな、けれど激しい快感を生ずる女の急所であつた。

「あひいっ……そこはっ……そこはだめだっ……あああああつ」

しゆるっ——。微かに撫でられるだけでも敏感に反応する肉豆が何のためらいもなくすり上げられる。それだけで股間から全身に苦痛にも似た激しい快感が巨波となって駆け抜けていく。ビクビクとひきしまった内腿が痙攣していた。

「おおっ、これは……フォンルン殿、男女の正体見たり、ですぞっ」

「なんと……これはこれは……イーファン殿、おみそれいたしましたぞ」

男たちの顔には微かな賛嘆と、嘲笑。そして淫らな笑い。

「あっ……ああっ……そこは……だめだっ、あっああっあ——っ」

男の指につままれた敏感な肉真珠は、薄桃色の粘膜を蜜にからめながらもヒクヒクと震え、淫らながらも美しい。だが、特筆すべきはその大きさであった。小さな皮のフードを剥がれた淫核は並の女性の倍以上もあるうか。豆や真珠と評するには立派すぎるものであった。

微かに驚きを含んだ声が淫らに響き、敏感すぎる肉の果実は蜜をかぶりながらジユクジユクと全身に淫らな毒のごとき快感をいきわたらせていく。

「このように立派なイチモツを持つておられたとは。これでは男と勘違いするのも無理からぬこと。どれ。確かめて進ぜよう」

「うあっ……ひいっ……くふっ……やっ、やめっやめ……ひああっ」

ピョコン、と頭を出した陰核をその指に捕らえた標苞が痛快そうに笑いながらそれをい

じると飛龍公主は全身をつながれたままに身も世もなく喘ぎ悶えるしかないのだ。それに加え、標笥が腰を使うたびに衝撃が全身を貫き、身体の中心を揺さぶられるような快感が脳天まで駆けのぼる。屈辱に焼かれるイーファンの精神は、もう一方からは官能の炎で焼かれているのだ。

（だめだっ……このままでは、だめになつてしまふっ……）

ぬちゅっ。ぴちやつ、ジュルリッ——。耳をふさぎたくなるような淫らな水音が自分自身の身体から響いてくる。はあっ、はあっ、はあっ——。どこか甘い、すすり泣くような喘ぎ声。それが自分の唇から漏れ出ているのだとは信じたくないが、飛龍と称えられた自分が惨めに敵陣につながれて嬲られているのは紛れもない事実なのだった。恥辱に胸を締めあげられながら、こみ上げてくる快感を必死に嘔み殺そうとするしかない。

「あっ、ああっ——やめっ、やめてくれっ——このままでは、このままではっ——」

「イツてしまうのだろうか？ 女だということを骨の髄まで思い知れっ」

イク。その意味するところは想像がついた。リン国の武将として、そして王女としてありえない屈辱だ。縛った髪を振り乱して否定しようとするイーファンの尻に敵将の醜く丸い腹が打ちつけられる。その衝撃のたびにつままれた肉豆から全身を揺さぶるような快感が波紋のように広がってしまうのだ。

「あっ、あああっ、くっ……くやし……こんなっ……ああおっ」

「ば、馬弦のものが……おつ、奥までつ、奥に当たっているうっ」

ただあるのは、快樂と羞恥。苦痛はもはやなかった。後ろ手に縛られてたよりない身の上も、最も敏感な部分を拘束され吊り上げられる屈辱も、いつの間にか全て快樂に変換されていった。

「こつちだ、イーファン」

ぐいっ。自慢の黒髪を引つ張られて苦痛に口が開いた瞬間、熱く固いものが押し込まれた。男の剛棒であった。思わず吸いついていくのは女の本能か、それとも彼女の淫乱さゆえか。ちゆるちゆると恥ずかしくも淫らな音がその整った唇から漏れた。

(う……これは……奴の……それなのに頭が……クラクラする……)

それは彼女を尻に嵌めた卑劣な義兄の持ち物だ。憎い男の匂いが口腔を満たし、熱く張り詰めた亀頭粘膜が舌を刺激する。口の奥深くにはお張っている破廉恥な姿を自覚した女が思わず吐き出そうとするのだが、男たちは残酷だった。糸を、たった一本の指でぴんとはじいたのだ。

「むぐうっ！ ……うっつ、うぐうっ——」

視界に火花が散った。標笹の太い指が肉粒に添えられていた。時に糸を引き、緩め、また時には淫蜜にぬめる肉粒をすりたてる。通常よりもぐっと大きな肉真珠は意地の悪い責めに恥ずかしくも立ち上がったままでもとに戻ることを許されず、このまま大きくなった

まま固定されてしまうのではないかと思うほどだった。

（ああっ……大きくっ大きくなっちゃってる……おマメ……ダメなのにつ）

口に含まされている男性器は憎いフォンルンのものだ。食いきつてやりたいほどに憎いはずなのに、今は不思議なほどに嫌悪感を抱かない。いつの間にか舌を這わせ、ピチャピチャとしゃぶりはじめていた。

「はふうっ……ぴちゃっ、んちゅっ……」

陶然として肉棒を含む夜叉公主。男たちはしてやったりと顔を見合わせるのだった。

「くっくっく。さしもの夜叉姫も肉の悦びには勝てぬか。可愛いものよ」

「ああっ……我はっ、我はそんなっ……はあっ、はあっ、はあっ」

脇腹に、胸元に舌を這わせながら肉豆をいたぶる標苞。下から突き上げてくる馬弦の剛直。口元を蹂躪する裏切りの義兄の肉棒。だが、墮ちた飛龍に群がるのはそれだけではなかった。

「おおっ……夜叉がっ……飛龍が俺のものをっ」

後手に縛られたその指に自らの逸物を握らせるのは名もなき兵士にすぎない。それでもイーファンのほっそりとした指は男のものを導かれるままにしごき、さすり、撫で上げる。ぎこちない動きはみるみるうちに滑らかなになり、龟头を、竿を巧みに刺激するようになっていく。

「くつくつく。牝奴隷の素質は十分じゃのう、イーファン」

「だが、心配することは無い。恥をさらした後は楽に死なせてやるさ」

「んふうっ……うっ、うぐっ、んくんくっ」

もはや男たちの残酷な言葉にもまともに反応できていない。崩壊したリン国第四王女の痴態は彼らも驚くほどであつて、つい数時間前まで男たちをなぎ払っていたよく鍛えられた肉体は淫らな肉奴隷の肌と化していた。

（わ……我は……もうっ……陛下っ……ああっ、母上っ……）

全身で男たちを受け入れ、悶え、喘ぎながら、意識はすでに薄桃色の霧に覆われていた。四方を包囲され、逃げ場もないままに一方的に蹂躪される決定的敗北を味わう女の心は、すでに諦観にも近かつたかもしれない。

「んんっ……あふっ、んくっ——っ」

肉が肉を、肌が肌を打つ音が恥ずかしい水音とともに男装の麗人の耳に染み込んでいく。男たちの嘲笑が、自らの喘ぎが、恥ずかしくも心地よい肉悦を生み出していく。

（だが……この感覚は……我を貫くこの火の柱のような快感はあつ——）

ズブズブと肉の奥までもえぐられながら腰を振る自分。数時間前まで敵を威圧し、戦場を駆けめぐり飛龍とまで呼ばれた自分が、今は遠かつた。肉欲の渦に飲み込まれ、快楽に押しつぶされそうになりながら悶え狂うのが今はふさわしい。

「イ、イーファ……殿っ！」

クン、と肉壺をえぐり巨根がうごめいた。それにこたえてしとどに濡れた媚肉がからみついてさらなる快感を呼ぶ。馬弦は限界に達しようとしているのだ。お互いの分泌する蜜が大量の潤滑油となつて内腿を濡らしていた。巨漢の手に包まれた乳房が、指の間にはさまれ、転がされる乳首が身体をくねらせたくなるほどの快感をもたらしていた。

「ふふん、卑しい騎馬民族同士、お似合いということかつ」

グイグイと艶やかな黒髪を鷲掴みにして義妹の口を犯す男のモノも痙攣を始めていた。それを見てとつた肥満漢が嬉しそうに笑う。

「飛龍めも、今にもイキそうじゃぞ。くっくっく……」

残酷な糸吊りにパンパンに張りきつた肉豆が男の指にしごかれ、もみつぶされながら恐ろしいほどの快感を腰の奥に送り込んでくる。全身が熱く燃え上がっているようで制御がきかない。クイクイと腰を動かしながら、屈辱的な陶醉のうちに絶頂が迫っていた。

（だっ、だめだっ、もうっ、もう——我は、我はっ我はあっ——！）

「うおっ、イクぞっ、飲め、全部飲めえっ」

「ひひひっ。イケッ、イッてしまえ、イーファンッ」

一足先に限界に達した裏切り者の肉茎が痙攣した。その瞬間、卑怯者の肥満漢が限界まで大きくなった肉豆をいやらしくつまんで揺すりたてたのだ。敏感な貝柱を引き抜かれて

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>